

戸田山和久『知識の哲学』は、(昔)風の言い方をすれば「認識論」の教科書です。「認識論」って何かと言えば「知性の一般理論」でしようか。人間とか動物の知的活動については心理学的な実証研究がありますが、「知性」と言えば生き物の専売特許じやなくA.I.(人工知能)だって知性でしょう。あるいは、実際にいるかどうか、いたとしたら会えるかどうかかもわかりませんが、E.T.(宇宙人)だって知性を持つわけです。しかしながらまだできてもいいものとか、そもそも存在しているかどうかわからぬものの「知性」についてどうやって語るんだ? そもそも実在する生き物でも機械でも、そいつに何ができますか? そいつには「知性」があるって言えるんだ? と、まあそういう問題が認識論のテーマです。もちろん科学時代以前には、神様や天使の「知性」もその重要なテーマでありました。

こういう問題の立て方の前提には、まず「『知性一般』とか『知性の本質』とかいつたものがある」という期待があります。人間の「知性」はただ単にそれだけのものではなく、神様や宇宙人やロボットやなにやかやと一緒に「知性の本質」を共有する「知性一般」の仲間たちの一つである、という。20世紀後半の、コンピュータと認知科学の発達は、そういう期待をぐっと高めました。コンピュータを数学的に基礎付ける「計算の一般理論」はまさに「コンピュータの本質」「コンピュータ一般」について教えてくれるものでした。そして「認知科学」という研究プログラムは、人間や動物の「知性」を計算を基礎に「知性」の本質をつかむことができる、という展望を開いたのです。「遺伝子」だつてデジタルの情報処理システムなんだから広い意味でのコンピュータであり、勇ましい話だつて聞こえてきました。

ところがこういう期待はまだほどなくしぶんできた——と言うと言えすぎですが、「ちょっと待てよ」と感じになつてきました。まず脳科学者たちは「脳はコンピュータとは根本的に違うメカニズムである」と言いついていました。たとえばコンピューターが膨大な仕事に順番をつけて一つずつ、かつできるだけ正確にやつていくのに対し、脳は同時にいくつの仕事を並行して、アバウトに、しかしすばやくやつている。となると「脳を『たんぱく質でできた一種のコンピュータ』と考えるよりは『コンピュータとは別のタイプの情報処理機械』としたほうがまだいいんじゃないかな?」ということになるし、更に「脳とコンピュータが本質的に異なるなら、コンピュータに知性が持てるという保証はないんじゃない」とは幸か不幸かならないところが面白味で

もあります。というのは、人間的知識の大きな特徴は、頭、というか身体の外の媒体に記録され、それを介して社会的に共有され、かつ分有されているというところにあるからです。この意味で来るべき「知識の科学」は、心理学だけでは足りず社会科学の手も借りなければならない。このへんの話の意外な展開は非常に味わい深いです。

それでも戸田山の本には全体としてみれば「科学の地道な発展が哲学の遠大な野望をくじく」といった印象が濃いのですが、逆にディヴィッド・チャーマーズの『意識する心脳と精神の根本理論を求めて』は久々に「科学的探究を突き詰めた果てに結局恐ろしい神祕が口を開けて待つていた」といった感じのいまだ珍しい「哲学」書です。その神祕、難問とは「意識とは何か?」です。著者は最新の認知科学、脳科学の知見をきちんと踏まえた上で、それらが意識の解明には根本のところで役立たないのはなぜか、を丹念に説明していきます。要するに「意識がない」という一点を除けば、外側からは普通の人間とは全く区別が付かない——普通にしゃべり、泣き、笑つているように見えるが、実際には何も感じていない、つまりは内面を持たない『ゾンビ』が存在すると仮定してみたところで、その想定は知られているあらゆる自然法則と矛盾しな

いし、『ゾンビ』と普通の意識ある人間を識別する科学的な方法もないのです。

もちろんチャーマーズも反科学主義者ではなく、今はまだないがやがて来るべき「意識の科学」がいつた

いどのようなものでなければならぬいか、それはどのような問題を具体的に解く必要があるのか、という展望を提示しているわけで、その意味では「哲学は科学の露払いで、最終的には克服される」という戸田山とよく似たスタンスを取っています。

しかしやつぱり「露払い」(つまり哲学)は必要だ、というわけでしょう。さて話は変わりますが、今年も日本に景気回復の展望はまったく見えないけれど、少なくとも問題の焦点は明らかになってきたようだと思います。どうも現在の不況は典型的なケインズ的不況のようですが、世界の指導的な経済学者たちは口をそろえて「とりあえず金融緩和しろ、財政出動もかまわん」とアドバイスしてくれています。そしてこのへんの事情について素人でも自分なりに考へた材料は、すでに本屋さんに山積みです。

で、この山積みの中からまず1冊選ぶとすれば、簡明ながら論争の中間総括としてすぐれた『構造改革論の誤解』でしょう。「構造改革」とは供給側・ミクロ経済の問題であるのに對し、現在の不況は根本的に需要側・

マクロ経済の問題である、とのメッセージは鮮明です。この他には『デフレの経済学』(岩田規久男・東洋経済新報社)、『誤解だらけの構造改革』(小野善康・日本経済新聞社)などがいいでしよう。

ここで重要なポイントは「不況とは政策的なテーマ、政治課題であつて、個人や企業の自助努力でどうにかなるようなものではない」ということです。ですから企業や個人に頑張りとか心がけを説くような本は、少なくとも不況についての経済政策論としてはまったく落第ですから、覚えておきましょう。ということはしかし、普通の庶民として不況に対してできることって、まともな経済政策をやつてくれそうな政治家に投票するだけなの?まあそう言つてしまつても当たらずとも遠からずですが、政治が無策のまま最悪の事態に陥ることも念頭において、いわばどうにもならない災害としての不況に備えるための指南書も、普通の庶民には必要ですね。で、そういう本もばちばち出でていますが、その中でここではあえて焦点を若い人に絞つた、玄田有史『仕事のなかの曖昧な不安 揺れる若年の現在』を挙げます。本書は、今回の不況の割を一番食っているのが、実は若年者であること、データをもとに丹念に説明しますが、同時にそういう若い人たちに直接向き合い、このきつい時代をどう生き延びるか、のアドバイスをも提供しています。僕などは読

BOOK OF THE YEAR 2002 BUSINESS·SCIENCE

んでいて「それはむなし、綺麗事だ」と思つてしまひます。それでも現に就職できない若い人たちに「あなたたちに仕事がないのは政府の無策のせいだ」と正しく教えてあげたところで、直接には何の役にも立たないことも事実でしょう。とすれば、著者の姿勢は基本的に正しい。この「正しさ」の苦さまで含めて、味わつていただきたい本です。

最後に挙げておきたいのは小熊英二『民主』と『愛国』 戦後日本のナショナリズムと公共性』です。十何年も前の学生時代、大学の先生方と話したり授業を受けていて気になつたのは、多く戦前・戦中生まれの彼らにとって「戦後」とは自分自身が生きた同時代、まさに「現在」の一部なんだな、ということです。ところがこちらにとってそれは自分が生まれる前の過去、「歴史」なんぞ、向こうが「現在」つまり「常識」のつもりで話されてもこっちとしては理解不能で困るわい、という経験がしばしばありました。僕と同世代の著者によるこの本は、まさにこの「戦後」、ことに最近評判の悪い「戦後民主主義」の意義を「歴史」としてきちんと測定し、その多面的な全容を明らかにしようという壮大な試みです。それはぼくのような「戦後」以後の世代にとってのみならず、自ら経験してきたがゆえに知つてゐるつもりだが実は多くのことを忘れてしまつた当の「戦後」世代にとつても学ぶところが大であるはずです。◎